



私の現場
komachi's point

山口が勤務する、チャンギ総合病院新築工事の現場。既存の総合病院の敷地内に、地上9階建ての病棟を新たに増築する事業で、予定工期は3年。現在は、基礎と躯体工事が同時並行で進められている。

「高校時代、まだ進路についてはそんなに考えてなかったところに図書館でたまたま建築物の写真を見て、すてきだな、こういうのを仕事にできたらカッコいいなと思ったのが最初です。あと、学生時代に上海の会社へインターンシップで行く機会があって、そこでものすごい勢いの建設ラッシュを見て、これからは海外で働くのも一つの選択肢かな、と思いました」

山口は、一九八六（昭和六十二）年、埼玉県生まれ。大学から建築の道に進み、清水建設株式会社に入社後はキャンパスやオフィスビルなどの現場を経験して、四年目の今年二月からシンガポールの新病院建設工事で品質管理を中心としたマネジメント業務に従事している。

「まだ七カ月とはいえ、日本を一回飛び出して、確実に視野が広がりましたね。これまで当たり前前だと思っていた現場の習慣が、国によっ

て違う。現場に祀られている神様もお祓いの仕方も。図面の構成や書き方、書類の管理の仕方も違う。休みの取り方も、宗教や価値観によって違いがあるということがわかりました」

再確認した、人間関係の大切さ

シンガポールでは、建設現場で働く大部分が外国から集まってきた人たちであり、日本に比べると人の入れ替わりが頻繁で、個々が取得する休暇も長期になる傾向にある。

「私の海外異動が決まった時、今まで一緒に働いた人たちが『がんばってこいよ』って温かく送り出してくれたんです。それがすごくうれしくて。たくさん時間をかけて築き上げてきたのは建物だけでなく、かけがえのない仲間であり、信頼関係だったんですね」

「こちらでは流動的な環境の中、チームで働いているので、困った時に助け合えるような信頼関係を作っておかなきゃいけない」

清水建設株式会社の山田真基所長は、山口の適応能力を強調する。

「初めての海外なのに、全く気後れせずにとらっと入ってきたなというのが私の印象です。私自身も苦労したので（笑）、そこはすごいな、と。シンガポールは小さな国なので、働く人も、物資の調達先も国際色が豊富。ここでそういう感覚を身につけることは、今後非常にプラスになっていくでしょうね」

輝け！

けんせつ小町

現場監督

山口 泉 / 平坂 友里恵

清水建設株式会社 CHANGI GENERAL HOSPITAL MEDICAL CENTER PROJECT OFFICE

清水建設株式会社 THOMSON-EAST COAST LINE T207 PROJECT OFFICE



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性技術者・技能者の愛称です。



言葉も文化も違う海外で、現地の技術者とモノづくりを進める苦労は、経験しないとわからない。だがそれは同時に、現場監督として貴重な知見を得ることのできる、格好の成長の場でもある。今回は、海外の現場で奮闘する、二人の若き現場監督を紹介する。





人が使うものは、つくるのも人。
その思いは日本も海外も同じ — (平坂)



建設業で築くのは、建物だけじゃない。
かけがえのない
人間関係も築けるのが魅力 — (山口)

慣習・文化の違いもある中で、外国人技術者に対する認識が変わった。「仕事の進め方からして全然違いますけど、こちらの技術者もトンネル工事ならトンネル工事専門の経験豊富なプロフェッショナル。教わることは多いです」

現地の職員・作業員とのやりとりはすべて英語。「学校の英語の勉強は全然得意じゃなくて。でも、『コミュニケーション』の手段として考えているので、隔たりは感じないです」

「世界を知る」といって、平坂の日課は、朝の現場巡回で危険なところがないかをチェックすることから始まり、指摘事項の是正や日々の労務管理、施工計画書作成など多岐にわたる。

「海外に来てわかったのが、日本の建設会社の技術力が一番で、他の国はもっと遅れているという認識が間違いないことですね。隣の工区の中国の会社は、当社と同等の技術力できっちり予定工期内に発進立坑を仕上げてる。しかも安い金額で請け負っているということは、競争力という点では上回っているんです」

「苦労しているのは、現地の作業員とのやりとりで、例えば現場を整理整頓するように『ハウスキーピング』って言い続けているんですけど、なかなか伝わらない。言われたところだけ片づけて終わり、みたいな。全然直らないから心が折れかけたこともあるんですけど、上司の工事長から言われたのが『諦めず、侮らず、焦

ンガポールに着任した。

清水建設(株)の辻上修士所長は、まだ赴任して間もない平坂のバイタリティに注目している。「この現場で日本人は、私を含めて四人だけ。あとは上司も先輩も外国人ばかりという中で、最初の一月を乗り切れたので、安心して見えています。まあ食べ物も何でも食べてるし、物怖じもしないし、頼もしいですよ」

「建設業で本気で働いてる人たちって、ホントにかっこいいんですよ。入る前の『ちょっと怖いかも』というイメージが完全に払しょくされるくらい(笑)。これからめざす方には、人と人とのつながりで建物ができていくっていう楽しさを味わってほしいですね」と、山口はこの仕事の魅力を笑顔でかつ力強く語ってくれた。

シンガポールのトンネルエンジニア

二〇二〇年度開通予定の、シンガポールで六路線目の地下鉄・トムソンイーストコーストラインのトンネル工事現場。この清水建設(株)の工区にも、日本人の現場監督がいる。

「父が建築関係の仕事をしていることもあり、小さいころから工事現場でもらってきた材木で遊んでいたんで、そこからのづくりに興味を持ちました。大学・大学院ではトンネルの研究をして、現場見学会に行くうちに、この業界に親近感を持ちました」

現場監督・平坂友里恵は、奈良県出身、一九八六(昭和六十一)年生まれ。

「私が就職活動をしていたのは震災が起きる前で、もちろんオリンピックも決まっていませんでした。そこで、インフラ整備の需要が大きい海外で技術者として貢献したいと考え、入社以来、海外工事を希望していったんです」

入社後三年間は外環道の大和田建設所で現場・設計・工務などを経験し、今年の六月にシ

私の現場
komachi's point



平坂の勤務先、「MRTトムソンラインT207工区」。全25工区のうちの一部を清水建設株式が請け負う。他の工区にも日本を含む世界各国のゼネコンが集結する、国際色豊かな現場だ。

私の仲間
komachi's point



左から、平坂友里恵、小屋敷梨沙、福田未那弥、山口泉。小屋敷と福田は、事務職として入社1年目からシンガポールに赴任している。いずれも、清水建設株式のグローバル戦略によって海外派遣希望者の中から選ばれた人材だ。

「『あ』の三つの『あ』。私もすぐ諦めかけたり焦ったりするんで、その基本を大事にしています」
日本にいたら、海外の建設会社の現場を見ても作業員にこちらの意図は伝わらない。そうし

た「常識」が通用しない世界で、多くの人とともにモノづくりを進めていく。
「まさに私なんかは、若いうちにはいろんなことを経験して、ということ海外に出させてもらっているんですけど、こんないろいろな経験を積めるのもゼネコンの魅力だと思います」
「日本でも海外でも、人が使うものをつくるのはやっぱり人なんです。こちらにも何人か女性スタッフがいますけど、厳しい環境でもみんな続けているのは、ものづくりが好きで、やりがいを感じているからだだと思いますね」



profile

ひらさか・ゆりえ●1986(昭和61)年、奈良県生まれ。大学院卒業後、2012(平成24)年清水建設株式に入社。土木事業本部に配属され、外環道大和田建設所に約3年間勤務後、今年6月より現職。

やまぐち・いづみ●1986(昭和61)年、埼玉県生まれ。大学院卒業後、2011(平成23)年清水建設株式に入社。建築事業本部に配属後、大学や豊洲新市場水産仲卸売場棟などの現場で勤務。今年2月より現職。